

海道探訪

しまづくりの現場

深江田原に広がる
一支国の王都
弥生時代の暮らしを物語る
原の辻遺跡から
壱岐の新たな歴史が始まる



掛木古墳



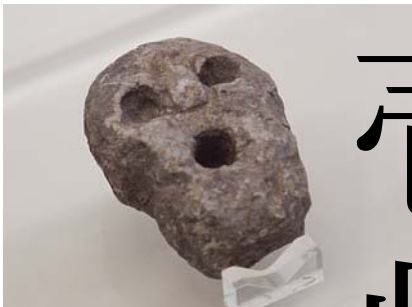
双六古墳



大陸との交易を物語る船着き場跡の模型



原の辻展示館では貴重な遺物を展示



原の辻遺跡から出土した人面石

壱岐

古代の浪漫を感じる
歴史と伝説の島

眼下に見下ろす島々を眺めていると、やがて着陸を告げる機内アナウンスが流れ、飛行機はゆっくりと滑走路に降り立った。

壱岐島は長崎空港から飛行機で約三十分。豊かな自然と新鮮な山海の幸が魅力の島である。古くから日本と大陸との交流の要所として重要な役割を果たしてきた島としても知られており、独自の歴史に育まれた数多くの史跡が残されている。その代表格が国指定特別史跡「原の辻遺跡」である。島の南東部に位置し、約百ヘクタールほどの広さを持つこの遺跡は、紀元前二〜三世紀頃から紀元三〜四世紀頃にかけて形成された大規模環濠集落。中国の正史「三国志」の中の「魏志倭人伝」に登場する一支国の王都と特定されている。遺跡のあちこちから、中国時代の貨幣や土器、石棺や甕棺、先祖を祀るために用いたと思われる人面石など、弥生時代の暮らしを物語る貴重な遺物が数多く出土しており、二千年の時を超えた壮大な古代の浪漫を感じさせる。



鬼の窟

1722年、江戸幕府から壱岐国の石窟(古墳)調査を命じられた平戸藩主松浦氏は、すぐに調査を開始。石窟の絵図を作成して幕府に提出した。これを受けた幕府は、「壱岐国の石窟の崩壊を禁ず」という命令を出したという。これが、今も多くの古墳が壱岐に残っているゆえんなのかもしれない。

そして、五世紀後半から七世紀にかけては、巨大な古墳が次々に造られた。現在確認されている二百六十五基のうち九十一基が、島のほぼ中央、国分、亀石地区に集中している。

全長九十一メートルにも及ぶ県内最大の前方後円墳「双六古墳」と、県内唯一のくりぬき式家形石棺がある「掛木古墳」に立ち寄った。

その昔、島には五千匹の鬼が棲んでおり、それを筑紫の国からやってきた若武者が退治したという「鬼ヶ島伝説」が今も語り継がれている。古墳は鬼たちのすみかと思われ、地元の人たちは今でも古墳のことを「鬼の窟」と呼ぶ。一見、小高い丘を思わせるその姿だが、内部に足を踏み入れると自然石に囲まれた荘厳な空間が広がる。どこから、どのようにして巨大な石を運び、積み上げたのか。当時の技術の高さに驚いてしまう。後年、これを目にした島民が鬼の所業と考えたのもわかるような気がする。